

[新パラオ通信]

パラオと私

高橋吉男

All about SWINE 62, 41-46

前号の最後にこのパラオ通信は1回でošimaiになるかも知れませんか書きました。その後連絡を待っていましたが、パラオ政府からは全く連絡がありません。

1回でošimaiになると思っていました、編集者から、もう少し書くようにという事でしたので、事後談とパラオで気が付いたことや思い出などについてもう少し記してみたいと思います。

1. 農業局の話

私の契約書が大統領の署名を得るために政府の関係部署に上がったことは確かだったそうでした。しかし、パラオ政府が人を雇用するには1ヶ月間の公募が必要という規則があったのに公募がされていなかったため、差し戻されたということでした。公募の準備をしているとのことでしたが、その後、公募がされたかどうかは判りません。多分、このまま消えてゆくのでしょう。

海外で仕事をする時には様々なお国事情(制度、歴史、人情など)があり、日本とは大きく違うのが当たり前と考えるべきですね。今回、最も困ったのは連絡が無いことでした。問い合わせや提案に関して返信がありませんでした。

2. 最近のパラオで感じたこと

コロナのためなかなか訪れることが出来なくなり、3年ぶりに行ったパラオですが国際政治の影響による大きな変化を感じました。

前号に書きましたが、パラオは南太平洋の要ともいえる位置を占めています。近年、東アジアの某大国が太平洋への進出を計っています。某国の漁船がパラオの排他的経済水域で魚を取ってパラオ警察と銃撃戦を起こしたこともありました。

パラオは独立国ですが、防衛はアメリカに委託しています。逆に言うとアメリカが軍事目的に使用することが出来るということでしょう。パラオの収入の柱とも言えるのが、アメリカとのコンパクト・グラント(自由連合協定援助金)という国家予算の大半を占めると言われる援助金ですが、アメリカが太平洋を防衛するための経費と考えられないことはありません。某大国がさほど力を持っていないころは数十人のアメリカ兵が町から離れた所に駐在しているだけで、街中では時々見かけましたが、目立ちませんでした。今回は多くの米兵がホテルを借り切って滞在していて、朝ランニングをしている米兵をよく見かけました。メインストリートを軍用車両が大きな音を立てて移動していることもあり、平和な南の島がどんどん、きな臭くなっていました。

南太平洋の多くの国が某大国の圧力で台湾と国交を断っている中で、パラオは台湾との国交を保っている数少ない国になっています。その為もあってか台湾もパラオを重視してして、様々な援助をしています。

特に目立つのが準幹線道路の整備です。本島一周道路や都市のメインストリートなどの幹線道路はアメリカの援助によって立派に整備されていますが、幹線から枝分かれする準幹線道路は、10年前には入り口付近が舗装されているだけでほとんどが未舗装でした。その後も台湾は少しずつですが10年以上にわたり舗装工事を続けていて、舗装された道路が増えて色々な所へ行きやすくなっていました。現在もコツコツと舗装工事が行われています。



台湾の援助による施設にはこの様な看板を設置しています

台湾は援助で作った場所にこの様な看板を設置しアピールしています。いたるところで見ることが出来、効果的だと感じました。日本も援助で作った施設には立派な記念碑を設置していますがこの看板ほど目立ちません。看板の方がお金もかからずアピール力がある様に感じます。

日本が援助している金額は大きいのですが、長期的展望を持って持続するものが少なかったよう

に感じます。

パラオの農業、畜産関係についてですが、私のいた10年前には野外で昔ながらの方法(2012年AAS41号番外編)で豚が屠畜、処理されていました。豚の飼料はほとんどがホテルやレストランの残飯で、一部のみアメリカ西海岸から輸入された袋入りの配合飼料が使われていました。配合飼料は高価なのにもかかわらず、高温多湿の気候のため輸送や貯蔵中にカビにより品質が低下した物がほとんどでした。

その後、台湾の援助で小規模ながら近代的な屠畜場と飼料配合施設が農業局に設置され稼働しています。飼料配合施設では毎週1回配合飼料を作っています。飼料原料の保管にも中古コンテナにエアコンを設置したものを使用しているので、カビの問題は減ってきているようです。但し、全ての飼料原料を台湾からの輸入(原産地はアメリカでしょう)に頼っているため、主要原料の大豆カスとトウモロコシのバランスが悪い時が多いようです。私が行った時は、トウモロコシが不足し大豆カスが多くなるため食用油の添加でカロリーを上げ成分を調整していました。作りたての飼料を購入できるようになったので、多くの農場が配合飼料を給与するようになっていました。



台湾の援助により作られた豚の処理場
これに近接して日本の援助で食鳥処理場、衛生検査施設、食肉加工場が建設される予定です



台湾の援助により作られた家畜用飼料の配合施設

また、台湾は実験農場を持っています。実験農場では台湾の地鶏（黒い羽根の卵肉兼用種）の種鶏を飼育して雛を地元農家に供給しています。雌雄鑑別はしないで、地元農家で飼育して成長を待って雄は肉として利用し、雌は残して採卵鶏として利用しています。小規模な裏庭養鶏にはこの様な卵肉兼用種が適していると思います。



真っ黒な台湾の地鶏

豚は、ストールと分娩柵とL.D.Wを台湾から持ち込んで飼育、増殖して農家に供給しています。輸入した精液で種豚を更新する予定だったのがコロナの影響で飛行機の運航が止まり、輸入が出来なくて困っていました。最近台湾との直行便が再開したようなので、今頃はもう入っているか

も知れません。現地でも精液を採取して配布する試みをしたそうですが、上手くいかなかったと聞いています。豚のタイプは、台湾が育種改良の手法や素豚をアメリカに頼ってきたのでリーントイプが多く、パラオのようなどちらかといえば粗放な飼育には合わないのではないかと気になります。

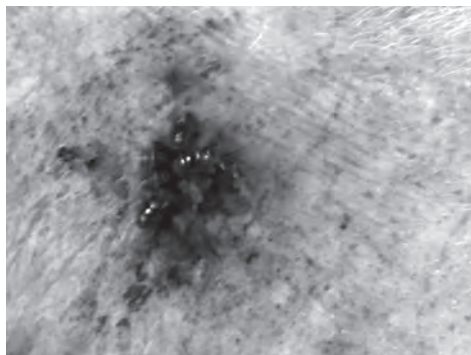
飼育する家畜の排せつ物などで堆肥を作り畑で野菜も作っています。採れた野菜は市内のスーパーに卸していますが、品質が良く評判も良いようです。台湾農場には台湾の農畜産の専門家が3名常駐していますが、腰を据えて働いています。

日本も10年前とは様変わりです、多くの援助を行うようになりました。屠畜場の横に2億円の無償資金協力で食鶏処理場と食肉加工場、そして食肉衛生検査場の建設を援助することが21年7月に調印され準備が進んでいます。南太平洋が国際政治上重要になったことと援助の拡大は何かつながりがあるのでしょうか？

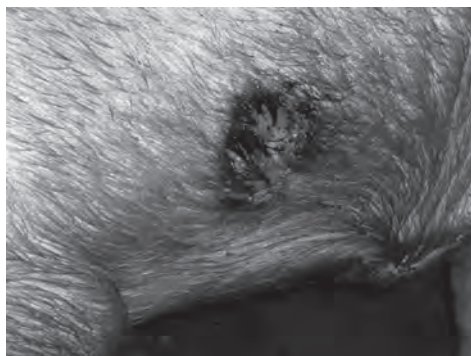
コロナの影響も大きく、特に日本人観光客がほとんど途絶えたためダイビングショップやツアー会社で働いていた日本人のほとんどが帰国していました。物価の上昇も感じられ、特に外食のメニューが高騰し昔ほど気軽に外食が出来なくなっていました。

3. 傷口に集まる蠅

パラオでは動物の傷口に集まり、傷からの浸出液を食べる蠅がいます。刺し蠅ではありません。傷の無い健康な皮膚であれば問題が無いのです。しかし、一旦傷が出来ると何処からとも集まって次第に傷口が大きくなります。多分、消化液を傷に分泌して組織を消化し吸収するのでしょうか。最



最初はこの様なものですが

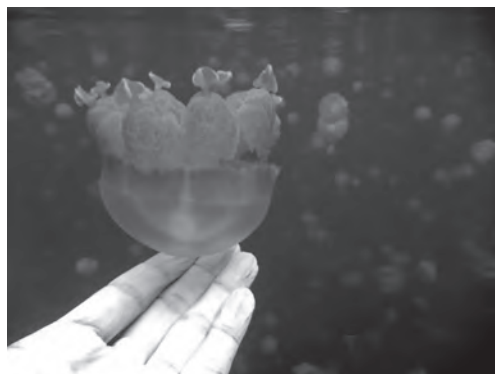


傷が大きくなったところに、木タールを塗ったところ

初は上の写真のような小さな傷ですが、追っても追っても集まってきて傷はどんどん大きくなり、下の写真のようになります。現地の人はあきらめている様でした。この蠅は豚だけでなく、犬や馬（僅かですが馬を飼っている人がいます）にも被害を及ぼしています。忌避作用のあるものが何かないかと考え、昔牛の蹄病の治療に使用していた木タールを思いだしました。下の写真は木タールを含む薬を塗った後ですが、蠅は全く寄ってきません。1回塗ると数日間蠅が来なくなるので、傷が治るまで定期的に塗れば良いのですが。完治して丈夫な表皮が出来ると蠅も来なくなります。

4. クラゲ池

パラオの観光地について一つ触れましょう。パラオを代表する観光地（入場料が一番高い）としてクラゲ池があります。島の真ん中に池があり、海岸から崖のような傾斜を登ってから下り池に行きます。他の島と同様に石灰岩で出来ているので地面には隙間が多く、地下で外洋と繋がっているようで水は海水です。何かの理由で閉じ込められたタコクラゲが、長い年月外敵がいなかったために毒針が退化したといわれています。スノーケルを付け救急胴衣を着けてプカプカと浮きながらクラゲと戯れていると時間を忘れる心地がします。



5. ゴミーズパラオ（美化活動）

日本人ならではのパラオでの活動です。パラオの日本人有志が毎週土曜日の夕方にゴミ拾いをしています。何ヶ所かを週毎に順番に回って道路端や公園などのゴミを集めています。毎回10名以上の参加があります。私たちも参加しましたが、大抵は全てが日本人でした。最近SNSで見ると、パラオ人からお礼の言葉をかけられるようになってきたそうです。パラオに住む日本人同士の交流や情報交換の場にもなりますし、長い目で見ればパラオの人達にも環境美化のモチベーションを



ゴミーズで拾ったごみを集めたところ

持ってもらえることを期待出来ます。今後も続けていただけることを期待しています。

6. パラオに嫁いだ日本人

パラオへ行くと必ずと尋ねる人がいます。パラオの人と結婚しているSさんという日本人女性です。旦那さんは板彫りというパラオ独特の彫刻の第一人者です。

Sさんの家はパラオの本島の北のはずれの人里離れたジャングルにあります。車で約1時間近くかかりますが素晴らしい景色の海のそばです。いつも、成田空港でお土産を買って行きますが大変喜んでくれます。訪ねて行くといつも旦那さんが椰子の実を取ってきてご馳走してくれます。これが店で売っている椰子の実とは一味違って美味しいのです。椰子の実は真ん中に固い殻があり、未熟な実のかたい殻の中に溜まっている果汁が美味しいのですが、果汁を飲んだ後、殻を割るとその内側に付いている胚乳がまた美味しいのです。丁度良い状態の胚乳はスプーンでこそげ取ってワサビ醤油で食べるとまるでイカのお刺身です。前号の写真で犬が食べていたのが胚乳の部分です。

海辺は非常に長い遠浅の海です。沖合にサンゴ



Sさんの旦那さんの彫った板彫り



Sさんの家の海岸（これこそプライベートビーチ）

で出来たリーフがあり、波の碎ける音が海鳴りとして聞こえます。リーフに寄せる波の音を聞いて浜辺にいと、時のたつのを忘れてしまいます。

パラオにはパラオ人と結婚した日本の女性も沢山います。私の知っているだけでも10人を超えます。一方男性でパラオ人と結婚してパラオに住んでいる方は1人しか知りません。何故でしょうか？日本の女性はパラオの男性に人気があるのです。日本人と結婚したパラオの男性は日本人の伴侶が自慢のようです。それ以外には？パラオの男性に魅力があるのでしょうか？更にパラオの魅力なのでしょうか？多分両方なのでしょうね。かく言う我々夫婦も、今回「パラオでの仕事」の話に乗ってパラオに行ったのも、パラオの魅力にひかれての事ですから。

7. 車

パラオの車のほとんどが日本の中古車です。日本より日本車の割合が多いように感じます。日本統治時代は左側通行だったのがアメリカの信託統治下に入り右側通行に変わりました。右側通行に右側ハンドルの車です。最初は大変戸惑います。狭い国ですので慣れると景色と位置の関係が刷り込まれるのでしょうか、しばらく日本で暮らしてパラオに行っても違和感を感じなく運転できるから不思議です。日本からパラオに輸出する中古車は10万km以上の走行距離か、13年以上経ったものがほとんどですが、パラオに入った時は「ニューカー」と呼ばれます。車の扱いは決して丁寧ではありません。外見はガタガタ、定期点検もほとんど無く、車が動く限り乗ります。改めて日本の車の丈夫さに感心します。窓ガラスが割れても平気です。気の利いた人は写真のように透明なシートを貼って使っています。動かなくなっても売れます。目的は部品を利用するためです。



割れたリヤウインドウを透明なシートで補修して使用している車

8. (パラオ語になった日本語) ジャバラウ

パラオは大戦終了まで30年以上日本が統治していました。パラオと日本の関係についての本は沢山出ていますので細かいことに興味のある方はそちらを見ていただきたいと思います。日本統治の間にパラオ語として定着し、今はパラオ人は語源が日本語とっていない単語が沢山あります。ジャバラウと呼ばれていて、私が持っているリストでは884語あります。少し紹介して私のパラオ通信を終わります。

ブタバブタ：

豚を呼ぶときに使う言葉です。鶏の「コーコーコー」、子牛の「べーべーべー」でしょうか？

タネブタ：もあります。

ショウガナイ、ダイジョーブ、アブナイ：

これはお分かりいただけるでしょう。よく使われる言葉です。

スコーキ：飛行機です。

スコージョー：飛行場です。

ツカレナオース：

ビールを飲むという意味です。

シューカン：

冠婚葬祭、新築祝い等のご祝儀です。

アタマサビテル：

会議の時、ある人がとてもトンチンカンな発言をして皆が爆笑しました。直後に発言者が間違いに気付いて曰く「I am アタマサビテル」というように使うようです。

頭を錆させないように、頑張りたいものです。